

長野義言が見た即位礼

—義言『長月日並乃記』からみる

即位礼拝観と文化人との交流について—

浦野綾子

〔要旨〕 長野義言は、井伊直弼の側近として知られる江戸時代後期の国学者である。彦根藩に仕官し、井伊直弼のもとで政治に深く関わるようになった義言は、恐れられる存在となっていた。だが、義言は政治のために国学を修めていたわけではない。国学者として、各地の文化人と国学や歌会を通じて交流を行っていた一面もある。弘化四年九月二十三日、孝明天皇の即位礼が行われた際には、義言は即位礼を拝観するという好機に恵まれた。その時の様子を描いた義言の紀行文『長月日並乃記』には、孝明天皇の即位礼や調度品の描写とともに、京都のさまざまな文化人と交流している様子が記されている。本稿では、義言『長月日並乃記』の成立と位置づけ、そして義言の交流について明らかにしていく。

〈キーワード〉 長野義言・即位礼・『長月日並乃記』・文化人・交流

はじめに

長野義言（文化十二年（一八一五）～文久二年（一八六二））は、井伊直弼の側近として知られる江戸時代後期の国学者である。天保十年（一八三九）、伊勢国飯高郡にあらわれ、現地の蔵書家らと交流。のち、近江志賀谷に赴き、私塾である高尚館を開く。義言の噂を聞いた井伊直弼と天保十三年に対面し、直弼の国学の師として交流を深め、以後、彦根藩に仕官することとなる。井伊直弼のもとで政治にも深く関わるようになった義言は、安政の大獄の端緒となるなど、恐れられる存在となっていた。

だが、義言は政治のために国学を修めていたわけではない。国学者として、各地の文化人と国学や歌会を通じて交流を行っていた一面もある。弘化四年（一八四七）九月二十三日、京都御所で孝明天皇の即位礼が行われた際には、義言は即位礼を拝観するという好機に恵まれ、彦根から京都へ向かった。その時の様子を描写した義言の紀行文である『長月日並乃記』には、孝明天皇の即位礼、および、儀式調度品を拝観したときの義言の感動が記されており、また、さまざまな文化人との交流の様子が描かれている。

そこで、本稿では、義言『長月日並乃記』の成立を明らかにし、一般庶民から見た即位礼の記録との位置づけを行い、さらに、国学者・長野義言の交流について考察していきたい。

一、『長月日並乃記』の書誌

まず始めに『長月日並乃記』の書誌について記す。該当書は旧堀内家蔵、現在は皇學館大学附属図書館の所蔵（五葉蔭文庫資料）である。^{（注1）}写本二冊であり、どちらも義言の筆跡と見られる。該当書それぞれの書誌を以下に記す。

長野義言が見た即位礼―義言『長月日並乃記』からみる即位礼拝観と文化人との交流について―（浦野）

長野義言が見た即位礼—義言『長月日並乃記』からみる即位礼拝観と文化人との交流について—（浦野）

〔一〕『長月日並乃記』長野義言／二二・六×一六・五糧

【首題】長月日並乃記中卷／長野義言記

【外題】長月日並記 完

【序跋】なし

【卷末】長月日並記 中畢

【行数】十行

【装幀】袋綴

【表紙】縹色（後補表紙）

【印】堀内文庫、五葉蔭蔵書印

【備考】全体の左下部は虫損により欠落（判読不能な箇所あり）。後補表紙である所以は、表紙見返しの糊付けされ
た丁の中央に「長月日並乃記 中」とあるため。

〔二〕『長月日並乃記』長野義言／二五・四×一八・四糧

【首題】長月日並乃記下之卷／雜事／長野義言記

【外題】欠損（題箋の跡あり）

【序跋】なし

【行数】十行

【装幀】袋綴

【表紙】 紙の粉色

【印】 五葉蔭藏書印

【備考】 全体の左下部は虫損により欠落（判読不能箇所あり）。

二、成立について

書誌を踏まえ、該当書の成立について検討してゆく。

該当書の旧蔵者は伊勢国飯高郡の商人、堀内広城。広城は本居大平、春庭の門人であり、蔵書家であった。天保十三年に義言と対面し、義言の義兄弟となり、その活動を支援した人物である。該当書にみられる蔵書印「五葉蔭藏書印」は広城の蔵書であることを示している。^(注2)

該当書は、筆跡から義言自筆と推定され、また、草稿本に近い稿本である可能性が高い。これについては後述するが、本書が義言から送られており、堀内広城が所蔵していたこと、そして、本文中に推敲による訂正の跡が見られるためである。^(注3) なお、該当書は出版されておらず、義言の門人である中村長平によれば『長月日並乃記』は行方知れずとなっていたとみられる。^(注4)

該当書には序跋がなく執筆年は記されていないが、その内容が孝明天皇即位礼であることから、執筆時期は該当書に記載されている内容の最終年月日である弘化四年十月一日以降であることは間違いない。また、義言が広城に送った書簡群『長野義言尺牘』（以下『尺牘』と略称）によれば、該当書を広城に送る予定であったことが判明する。^(注5)

A. 弘化四年十一月一日付 堀内広城宛長野義言書簡

○京よりかへりての便りハとく聞え奉らまほしう侍りしかど、その時の日記ととも二奉らんとて日々おこたり侍りし

長野義言が見た即位礼―義言『長月日並乃記』からみる即位礼拝観と文化人との交流について―（浦野）

長野義言が見た即位礼―義言『長月日並乃記』からみる即位礼拝観と文化人との交流について―(浦野)

を、いまハ大かた出来侍らんと思ひ侍れど、まづとりあへず、このおこたり聞え奉りて、君もあねの君もいかさま二わたらせ給ふらん、きかまほしさになん聞え奉る。

○京都の日記とく奉らんと思ふゆゑは、九月廿二日、八ツ、京二着侍りしに、思ひもかけずよきたより侍りて、廿三日二ハおふげなくも日華門、月華門のきはまでまゐり侍りて、紫宸殿庭上の御儀式何かをちかくをがみ奉り、実二言葉にもつくしがたきかたじけなき事ども侍りしに、その後、関白様、諸大夫衆もいみじう心易くなり侍りて、又、歌の大意、思ひがけず殿下まで内々あがり侍り、ことに愚歌十ひら奉るべきよしにて、いとくかたじけなき御一言も内々ながらうけ給はり、実二身二あまれる事ども多く侍りし上に、晦日にハ又、四位、種田兵部少輔兼因幡守と申人、また、鈴木左衛門大尉と申人などのあないにて、行事官へたのミ呉られ、かたじけなくも紫宸殿上高御座の御飾より、その御とりおきあとにて賢堅の障子など二いたるまで、のこるくまなくをがみ奉り、内侍所、清涼殿などの軒廊などまで、つぶさにをがみ奉りし事など、こたびの日記すべてハ三卷侍れど、廿三日より三十日までの事、中一巻二侍れば、是を一日も奉りて、こたびのよろこびよろづ聞え奉らまほしくてなん。中くにかくハおこたり侍りし。

○大むね、末分権事ハ、ひとへに君の御かけにてかくまでなり侍り、思ひもよらぬ事さへ侍りしハ、いとく嬉しくかたじけなくなん。なほ、この事のくはしきハ次のたよりニ、長月日並ノ記是此度の奉るをミテしろしめし給ひてよ。そのうへ、かへり侍るをりハ、又、関白様、諸大夫衆より、いへづと二とて、さるかたぐの御たにぎくなどもらひ、又、千種殿、堤殿ハもとより植松殿よりも御懐紙、人々おくりて給ひ、そのほか、つぎにのほり侍りてハ古事記をとき聞え奉るべき仰など、いとねんごろにかずくうけ給はり、そのうへ、源氏の事ニ御たづねの品々侍りて、是もいまか、りさしのミにて、かねてしろしめしけるやう、おのれいまだ源氏物語にハさのミふかくも心をつくさず侍

るを、こたびことのついでに簾木の巻の事、是までとき得たる人なき事ども、ことのついでに聞え奉りしかば、いミ
じうかんじ給ひて、中く今ハわづらひの種二なん、さりながらおのが身二とりてのよるこびハ又なき事二なん。

尺牘A傍線部「その時の日記」「京都の日記」「こたびの日記」「長月日並ノ記」とあるように、義言は広城に、即位礼
拝観について書いた日記のことを伝えている。つまり、この尺牘Aがしたためられた弘化四年十一月一日には『長月日並
乃記』が執筆されていたこと、さらに、書名は当時から「長月日並ノ記」であったことが判明する。よって、本書は弘化
四年十月一日以降、十一月一日までに成立していたと確定される。義言は孝明天皇の即位礼を拝観した後、すぐに本書を
執筆したことになる。それほどまでに、即位礼や調度品を間近で拝観したことや、京都の文化人らと交流したことは、義
言にとって有意義な経験であり、書き残さねばならないものであったのだろう。

また、尺牘Aからは、『長月日並乃記』が全三冊であること、九月二十三日から三十日までの内容が記されているのは
『長月日並乃記』の中巻であることが分かる。該当書(一)首題には「長月日並乃記中巻」と記載されており、内容も九
月二十三日から三十日までを中心としていることから、該当書(一)が『長月日並乃記』中巻であり、十月一日の内容
が記されている該当書(二)が下巻であると推定される。(注6)

では、義言が『長月日並乃記』を広城に送った理由は何であろうか。『尺牘』によると、義言は広城に、子息の良広と
信次郎の二人を上京させて、一緒に即位礼を拝観するよう促している。(注7)

B. 弘化四年九月六日付 堀内広城宛長野義言書簡

この月廿三日、御即位にて万代まれなる御よそほひのよし、おふげなき事ながら 皇国の道もやうく立かへるべ
き時二なりぬるをよるこび侍りぬ。それ二付ても、その頃二ハ四日五日かけにて、品々よりのほらまほしうも思ひ給
ふれば、いかで良広に久々あひ侍らぬを、こたび信次郎と申合のほらせ給ハ、よるこび侍りぬべし。宿ハ粟田植髮堂

長野義言が見た即位礼―義言『長月日並乃記』からみる即位礼拝観と文化人との交流について―(浦野)

長野義言が見た即位礼―義言『長月日並乃記』からみる即位礼拝観と文化人との交流について―（浦野）

二侍れば、そこへまゐらば同じ宿二住侍らん。

結局、広城の子息は上京しなかつたようである。そこで義言は、広城に即位礼の様子を伝えるために『長月日並乃記』のうち特に即位礼当日の内容が記されている中巻を送つたのだと考えられる。尺牘Aでも即位礼の内容に触れてはいるが、書簡では伝えきれなかつた当日の詳細な状況を、義言は広城に知らせたかつたのではないだろうか。だが『長月日並乃記』は、広城に即位礼の様子を伝えるためだけに執筆したというわけではない。井伊直弼も義言から『長月日並乃記』を借用して、読んでいたようである。

C. 弘化四年十一月廿五日付 堀内広城宛長野義言書簡

こたび御即位拝見の日記、中巻をとく奉らんと思ひ侍れば、江戸の方いまだ彦根より出来かへり侍らねば、清書の方ハ今少しおそなハリ侍らん。されば、この草稿をそれまで奉りおくを、こはいとくたどぐしき事にて、いふべき事も考へ合せたる事もつくして侍らねば、必、人にハミせ給ふな。やがて奉らん清書の方ハ、その日の冠衣なども大方しらべて書しるしおきつ。

この書簡では、義言が井伊直弼に『長月日並乃記』の清書本を送つていたこと、その清書本が義言のもとにまだ返つてきていないため、やむなく広城のもとへは草稿本を送ろうとしていたことが判明する。よつて『長月日並乃記』は、広城だけではなく、井伊直弼など義言周辺の人々も読んでいたこととなる。『長月日並乃記』は、広城や門人など、義言周辺の人々に読ませるために書いた即位礼の記録であるといえよう。また、清書本と草稿本については、嘉永元年（一八四八）四月十五日付の『尺牘』によれば、『長月日並乃記』中巻を広城に送る予定だが、本書は義言のもとに残してあると記している。このことから、尺牘Cでは広城に草稿本を届ける予定だったが、予定とは異なり、広城には清書本が届けられたのだと考えられよう。しかし、実際に広城のもとへ届けられたのは、清書本でもなかつた。『長月日並乃記』（一）に

は

皇国の大礼唐風になりし御代の事ハ清書の方ニくはし

と記された箇所があり、五葉蔭文庫資料『長月日並乃記』以外に清書本が存在することを示している。先述したように、本書には推敲による訂正の跡もある。義言のもとに草稿本が残っていたのかは不明ではあるが、これらを踏まえると、五葉蔭文庫資料『長月日並乃記』は、清書本ではなく草稿本に近い稿本である可能性が極めて高いと言えるだろう。

以上、『長月日並乃記』の成立と、本書が堀内広城に送られた経緯について述べた。なお、義言は嘉永元年十一月一日に行われた孝明天皇の大嘗祭も拝観しており、その時の紀行文も執筆したと思われる。

D. 嘉永二年一月十六日付 堀内広城宛長野義言書簡

大嘗会の日記ハとほからず奉らんを、いましばしまたせ給へ。

E. 年不明二月十八日付 堀内広城宛長野義言書簡

大嘗会の事、くはしくうつしとり十四巻ものし侍れば、ほどなく日記書て奉らん。御車の図のなり侍りぬと堤の殿よりの給ひつれば、いかにしてうつしとらまほしう思ひ給へ侍りぬ。

尺牘D、Eには、義言が大嘗会の日記を執筆したことが記されており、その存在を示唆している。ただし、大嘗祭について義言が書き残したという日記は、その内容、所在ともに不明である。

三、義言が見た孝明天皇即位礼

『長月日並乃記』の内容は、大きく二つに分けることができる。

長野義言が見た即位礼―義言『長月日並乃記』からみる即位礼拝観と文化人との交流について―(浦野)

長野義言が見た即位礼―義言『長月日並乃記』からみる即位礼拝観と文化人との交流について―（浦野）

①孝明天皇即位礼の拝観

②京都の文化人との交流

一つ目の孝明天皇即位礼の拝観は、九月二十三日に行われた即位礼の拝観ならびに儀式次第と、翌日以降に再び調度品等を拝観したことについて描いており、『長月日並乃記』（一）の大部分が該当する。二つ目の京都の文化人との交流は、九月二十四日から十月一日までに義言が会った人物や、参加した歌会について描いているものであり、『長月日並乃記』（一）の後半部分から（二）にかけて記載されている。

『長月日並乃記』（一）は、九月二十二日の記事から始まる。昨日までは栗田の植髮堂へ泊まり、即位礼の前日二十一日は旧知である高嶋式部のもとへ泊まったことが記されている。栗田の植髮堂は京都東山にあり、上京した義言がたびたび宿としていた場所である。即位礼前に植髮堂に宿泊していたことは、尺牘Bにも記載されている。^{（注9）}

九月二十二日の宿泊先の主である高嶋式部とは、京都の女性歌人であり、義言と交流のあった人物である。^{（注10）}高嶋式部が住んでいたのは、『平安人物志』文政五年版によると木屋町二条南、嘉永五年版では丸太町川東となっている。^{（注11）}義言が宿泊した弘化四年には、式部はどちらに住んでいたのかは定かではないが、いずれにしても、義言が宿としていた植髮堂よりも式部の住まいの方が御所に近かったために、即位礼前日に移動したと考えられる。

さて、孝明天皇の即位礼を拝観できることを、義言がとても喜んでいた様子が該当書より読み取れる。

明日の大礼をちかく参りて拝見奉る事いざなはれつゝ、夢かうつゝ、かたとどるばかりに、うれしさもうれしく

このように拝観を喜んでいる義言であるが、公家でもない義言は、なぜ孝明天皇の即位礼を拝観することが出来たのであろうか。近世期には、即位礼が行われる際は幕府から町触が出され、一般の拝観が許されていたという。^{（注12）}即位礼の儀式および調度品を一目見ようと、御所には各地から拝観を望む群衆が押し寄せ、怪我人どころか落命した人まで出ている。^{（注13）}

義言も『長月日並乃記』に、各地から見物人が京都を訪れたことを記している。

けふの大礼き、およびつゝ、ひなよりえびすよりはるくのほれる人々、かつ都のも外にみちたり

このように、一般の拝観も許されていたため、義言も孝明天皇の即位礼を拝観することができたのである。なお、第四節で詳述するが、義言は京都文化人との交流によって、庶民よりも御所内部を拝観する機会も得ている。

九月二十三日の即位礼当日に、義言は高畠式部と一緒に御所へ赴く。『長月日並乃記』には

まづ中立売の御門よりいりぬ

と記されており、中立売御門から御所内に入り、その後、公家門（朔平門）、腋門、日華門、月華門、承明門、長楽門といった各所を巡っており、御所を一周しながら即位礼の儀式や調度品を拝観したことが読み取れる。『長月日並乃記』には、即位礼の儀式次第や調度品について、詳細な記述がなされているのだが、これは、義言が拝観した折に実際に見たものに加えて、前節の尺牘Cにあるように「大方しらべて」から本書を執筆したためであると推察される。

また、即位礼翌日の二十四日には、「諸人に拝見ゆるさせ給ふ」と聞いたため、再び御所を訪れて内部や調度品を拝観している。さらには、前節の尺牘A波線部に記されるように、京都の文化人からの紹介によって、九月三十日に再び御所を訪れ、一般では間近で拝観するのは困難であろう、紫宸殿や清涼殿、南庭、さらには高御座の装飾まで拝観できたことを喜んでいる。

このように、即位礼の儀式や調度品を拝観した義言であるが、儀式の拝観に際して、どのような服装で臨んでいたのだろうか。即位礼の拝観とはいえ、一般庶民は特に着飾っていないかつたようである。^(注1)残念ながら、義言自身が身に付けていた服装については、『長月日並乃記』や『尺牘』には記載されていない。だが、義言が拝観した際に会った人物の服装については、『長月日並乃記』に次のように記している。

長野義言が見た即位礼―義言『長月日並乃記』からみる即位礼拝観と文化人との交流について―（浦野）

長野義言が見た即位礼―義言『長月日並乃記』からみる即位礼拝観と文化人との交流について―（浦野）

八ツ時過る頃、醒ヶ井の川口、青山正明、二人にあひぬ。ミなふるびたる雑色に、なえたるえぼしを逆さまに着たる、あやしき姿は、おもふせつべく見えたれど、さすがにふるさとのしるべはなつかしければ、よびかけて、ともに建春門の東に出てしばしやすらひたり。

知人を「あやしき姿」であると、なんとも酷い感想を漏らしている。即位礼拝観のために、普段は着慣れていない衣装を着用したのであろう。この描写から、彼らが烏帽子をかぶっていたり、雑色を着ていたりしていたことが判明する。庶民のなかには、即位礼の拝観に合わせた装束の人たちも、少なからずいたということがわかる。

以上のように、義言は孝明天皇の即位礼の拝観を心待ちにしており、その心情をしたためたこと、そして、即位礼の様子については、義言が実際に拝観した即位礼の儀式や調度品と、後に調べたものを加えて『長月日並乃記』は執筆されたのである。また、本書からは、一般庶民が拝観した場所や、その時の様子、拝観時の服装なども読み取ることができる。『長月日並乃記』は、庶民である義言が執筆した孝明天皇即位礼の記録として、貴重な資料であると言えるのではないだろうか。

四、『長月日並乃記』にみる義言の交流

『長月日並乃記』に記される二つ目の内容は、義言と文化人たちとの交流の様子である。本書には、即位礼が終了した翌二十四日から十月一日にかけて、京都の文化人や旧知の人々と共に御所を拝観した様子や、北野天満宮や南禅寺、亀山天皇の亀山陵など、京都各所を巡ったことが描写されている。さらには、京都滞在中に義言が参加した歌会の様子や、その時の詠歌についても記されている。

第二節の尺牘Aに記されているとおり、義言は九月二十八日、種田兵部少輔に御所内部を拝観させてもらうことを約束

し、晦日（三十日）に紫宸殿高御座を拝観する機会を得ている。^(注15) その約束の様子を『長月日並乃記』九月二十九日条にも記している。

又きのふのちぎりにて、種田兵部少輔殿より晦日の日に紫宸殿高御座御とりおきの事あり。まるれをがませてんとありけるに、嬉しさもうれしく

約束通り、義言は九月三十日に種田兵部少輔、鈴木左衛門大尉の案内によつて紫宸殿や清涼殿、高御座などを間近で拝観している。このような好機に恵まれたのも、義言が京都文化人と交流を深めており、国学者として義言が京都で築き上げてきた知名度によるものである。^(注16)

こうした京都文化人との交流により、義言は自身の著作『歌の大意』を、関白・鷹司政通に献上することができている。^(注17) これは、京都の進藤千尋に渡した『歌の大意』が、進藤から種田兵部少輔に渡り、種田によつて関白（鷹司政通）に献上されたものである。^(注18) 第二節の尺牘Aを再び引用する。

関白様、諸大夫衆もいみじう心易くなり侍りて、又、歌の大意、思ひがけず殿下まで内々あがり侍り、ことに愚歌十ひら奉るべきよしにていとくかたじけなき御一言も内々ながらうけ給はり、実二身二あまれる事ども多く侍りしこのように、『歌の大意』が関白・鷹司政通に献上されたこと、それによつて、関白が義言の短冊十枚を求めていることが記されている。同様のことが『長月日並乃記』にも次のように記載されている。

きのふの事にて明れば、十月朔日なり。よべ進藤加賀守方より御使あり。せうその中に 関白様の諸大夫中より、義言の短冊十枚した、めてよとて、ふりはへたる使してもてきたり。旅の御すまひにて侍れば。墨筆なども心のまゝにハなりもてゆかじを、こゝにもものして書給へ、なほこれにハ相かたらふべき事もあるれば、こよひの中になんとありけるに、をりふしはるくとぶらひたる人あれば、しばしありて参りけるに、件のせうそこくはしく書れたり。さ

長野義言が見た即位礼―義言『長月日並乃記』からみる即位礼拝観と文化人との交流について―（浦野）

長野義言が見た即位礼―義言『長月日並乃記』からみる即位礼拝観と文化人との交流について―（浦野）

るハ御いつ頃おのれ著述の歌の大むね上下、進藤氏におくり侍りしを種田兵部少輔許におくられしかば、思ひがけず兵部方より殿下の御前にも出けるよし、かねていひおこせ給へるほどなれば、それだにはづかしきほどにて、いかでかと思ひいなみても、この主の御なさけくしき物がたりひそかに承り侍りてハ、中々なる御事にていなみ申べき筋にもあらず。いさゝか思ひ出るまゝに書つけつ。

自身の著作が関白に献上されたこと、さらには、自身の歌（短冊）を求められたことは、大変名誉なことであったのだろう。尺牘Aからも『長月日並乃記』からも、喜びに満ち溢れている義言の様子を窺うことができる。

このように『長月日並乃記』からは、京都における文化人との交流によって、義言が多くの好機に恵まれたことが読み取れるのである。

さらに『長月日並乃記』には、千種有功、高畠式部との交流の様子も描かれている。^(注15) 第三節で述べたとおり、高畠式部は即位礼前日に義言を泊めており、当日も一緒に拝観に行くなど、義言とかなり親しい間柄であったことが分かる。一方の千種有功も、義言と親しくしていたとみられ、義言の書簡『尺牘』にもたびたび名が挙がっている。また義言は、千種有功や、有功の子息である有文の書跡を、高畠式部を通して入手しており、その様子は『長月日並乃記』にも描写されている。このように深い交流を持っていた義言と千種有功、高畠式部との関係は、『長月日並乃記』九月二十六日条と十月一日条に記されている、千種有功のもとでの酒宴・歌会の様子からも読み取ることができる。

千種有功の歌会に集まったのは、義言のほかに、倉谷友于、長沢伴雄、小泉保敬、三浦尚之、木村寛、高畠式部、一井倭文子らである。^(注16) 特に十月一日に開かれた歌会では、集まった人たちが酒に酔ってしまい、冗談を言い合いながら歌を詠んでいたと『長月日並乃記』に描かれている。

歌のまどろに侍りけるに、ミなゑひて歌の事も聞えず、たけなはになりてよりハ、ミなたはぶれたる事どもいひあひ

けるに、殿も魚ありとおぼして、たはぶれたる事などの給はす。

開催された歌会は、いわば気心の知れた仲間うちでの歌会だったのであろう。なお、この歌会に参加していた三浦と木村は、彦根における義言の門人である。つまり、京都の文化人によつて開催された歌会に、義言だけでなく、彦根の義言門人も一緒に参加していたことになり、彼らも義言と同様に京都文化人たちの歌会仲間であったといえよう。『長月日並乃記』に描かれている、こうした歌会の様子からは、義言のネットワークの広さをも窺うことができるのである。

以上のように、『長月日並乃記』からは、義言が京都の文化人たちと交流していた様子や交流相手についても知ることができるのである。国学者としての義言は、京都文化人との交流を深めており、さらに、その交流には彦根の義言門人たちも仲間として加わっていた。『長月日並乃記』は、京都における義言の文化的ネットワークについても知ることができる資料であると言えよう。

おわりに

以上、本稿では『長月日並乃記』の成立を確定し、義言が見た孝明天皇の即位礼と、義言の京都文化人との交流について明らかにした。『長月日並乃記』は、義言を通して、庶民がどのように即位礼を拝観したのかを知ることができる資料であり、さらには、義言の京都における知名度と、義言の文化的ネットワークにおける京都文化人たちとの交流を窺える、貴重な資料であるといえよう。また、本稿では触れなかったが『長月日並乃記』に記されている即位礼の儀式次第や調度品の装飾といった描写については、儀式について研究するうえで参考資料ともなるであろう。長野義言『長月日並乃記』は、庶民が見た即位礼の記録として、そして、義言の京都における文化人との交流について知ることができる資料として位置づけることができるのではないだろうか。

長野義言が見た即位礼―義言『長月日並乃記』からみる即位礼拝観と文化人との交流について―（浦野）

注

- (1) 『長月日並乃記』は皇學館大学附属図書館蔵、五葉蔭文庫資料。旧堀内家蔵。本稿では私に翻字し、句読点・濁点を付した。
- (2) 堀内広城は、伊勢国飯高郡の商人。蔵書家であり、本居大平・春庭に入門している。飯高を訪れた義言と義兄弟の契りを交わしており、義言の支援者でもあった。広城の家号「五葉蔭」は、堀内家の庭にある五葉松からとられている。詳細は高倉一紀氏「堀内広城の国学―近世蒐書文化論の試みⅡ―」（『皇學館大学紀要』第四十八輯、二〇一〇年）参照。なお、『長月日並乃記』（一）にある蔵書印「堀内文庫」は、広城の息子である千稲の蔵書印とみられる。
- (3) 『長月日並乃記』（二）の九丁ウラには、一行分に付箋を貼って訂正した箇所がある。付箋の下は別文であり、文章を推敲した跡とみられる。
- (4) 中村長平の「長野先生著述目録」によれば、『長月日並乃記』は「如何成しか分り難し」と記されており、当時は所在不明であったとみられる。田中千和氏『阿利能麻々・長野義言と門人中村長平』（中村長平五十年追悼記念会、一九五二年）参照。
- (5) 『長野義言尺牘』とは、義言が堀内広城およびその家族に宛てた書簡群（全十巻）の総称。皇學館大学附属図書館蔵、五葉蔭文庫資料。旧堀内家蔵。書簡の概要については、五葉蔭文庫の会「堀内家蔵「長野義言尺牘」一」（『皇學館論叢』第三十八巻第一号、二〇〇五年）、拙稿「皇學館大学附属図書館蔵「長野義言尺牘」の基礎的検討」（『皇學館論叢』第五十巻第六号、二〇一七年）参照。なお、当書簡は「堀内家蔵「長野義言尺牘」一」に巻一のみ翻刻されている。本稿では私に翻字し、句読点・濁点を付した。
- (6) 『長月日並乃記』上巻については、五葉蔭文庫資料からも未だ見つかっておらず、その所在は不明である。
- (7) 良広とは、堀内広城の長男・千稲のことか。前掲注5「堀内家蔵「長野義言尺牘」一」注記には、千稲について次のようにある。
堀内広城の長男千稲。「堀内家略譜」千稲略歴には以下のようにある。

一 千稲 通称初名律太郎、後利太郎、理一郎ト改名、良勝ノ長男、天保二年卯十一月廿一日生レ、明治二年巳二月ヨリ松阪出張寓居スルコト拾七年間、明治十八年三月山田浦口町転寓ス、本居内遠、長野義言ノ門ニ入テ皇朝学ヲ修シ、又和歌ヲ好クシ、門人モ夥多アリ、明治廿年五月末山田ヨリ帰郷ス、明治廿(二)年十二月八日、俄然発病、同十日没、五十八歳、法名宗真

信次郎とは、堀内広城の次男・準一のことである。同じく前掲注5「堀内家蔵『長野義言尺牘』一」注記には次のようにある。

堀内広城の第二子、準一のことか。「堀内家略譜」準一略歴には、次のように記されている。

幼名雅次郎又準造ト云。広城の次男ニシテ、天保五年五月五日生、安政二年三月十九日、多気郡相可村御子幸右エ門養子トナル、明治二十二年四月十六日病死ス、行年五拾六才也、法名釈寿勝徳

(8) 京都で義言が宿としていた場所は、植髮堂以外にもあったようである。前掲注5「堀内家蔵『長野義言尺牘』一」解題には、京都における義言の連絡場所について次のように紹介している。

二条家に入入りして、上京の機会が多かつた義言であるが、京における彼の連絡場所については、「毛衣」四の巻の見返しに、

長野義言大人消息など出すへき所

京都西木屋町二条下ル処 角倉為次様御内 美濃部平太殿

の覚書がある。

(9) 高島式部(天明五年(一七八五)〜明治一四(一八八二))は、江戸後期・明治時代の女性歌人。伊勢松坂生まれ。京都の千種家に出入りしていた針医の高島清音と再婚。香川景樹に入門し、景樹没後は千種有功に師事した。

(10) 『平安人物志』は国際日本文化研究センターのデータベースを参照した。

長野義言が見た即位礼―義言『長月日並乃記』からみる即位礼拝観と文化人との交流について―(浦野)

長野義言が見た即位礼―義言『長月日並乃記』からみる即位礼拝観と文化人との交流について―（浦野）

- (11) 近世期に即位礼の一般拝観が許されていたことについては、松本丘氏「近世の皇位継承儀礼と朝儀復興」（皇學館大学講演叢書『即位礼と大嘗祭の歴史と文学』皇學館大学出版部、二〇二〇年）、森田登代子氏「遊楽としての近世天皇即位式―庶民が見学した皇室儀式の世界―」（ミネルヴァ書房、二〇一五年）に詳しい。

- (12) 『孝明天皇実録』「菅葉」弘化四年九月二十四日条、ならびに二十五日条には次のようにある。（天皇皇族実録134『孝明天皇実録』第一卷、ゆまに書房、二〇〇六年）

二十四日庚子、晴、今明日自卯刻到申刻雑人拜見南殿庭上御即位御調度、終日群集不可謂者也、怪我人彼是有之、老婆一人、落命之由、風聞笑止々々、

二十五日辛丑、晴、今日亦雑人拜見御即位之跡、終日雑踏如昨日、伝聞今日亦怪我人有之云々、

- (13) 前掲注11「遊楽としての近世天皇即位式」参照。

- (14) 醒ヶ井の川口、青山正明とは、義言の門人であろうか。なお、醒ヶ井は近江坂田郡醒ヶ井宿のことである。前掲注5「堀内家蔵「長野義言尺牘」一」解題には次のようにある。

広城から義言への書簡も頻繁に認められたのであろうが、それは広城の雑稿「毛衣」三の巻に

○長野氏消息等出し所

江州彦根中藪 堀田道策

江州坂田郡志賀谷村 阿原権輔

市場村 三浦太伸

醒ヶ井宿 山屋庄七

と書き留められているように、上記四名のもとに届けられ、その後義言に転達された。

- (15) 種田兵部少輔とは、鷹司家諸太夫の種田氏のことか。

鈴木左衛門大尉とは、鈴木重弘のことか。義言『尺牘』にもその名があり、種田と同じく鷹司家に仕えた人物とみられるが、詳細不明。

- (16) 佐藤隆一氏「長野義言が伊勢国堀内家にもたらした情報」(『幕末維新の彦根藩』彦根城博物館叢書Ⅰ、サンライズ出版、二〇〇一年)は次のように論じている。

同年九月二十三日には孝明天皇の即位の礼が紫宸殿にて挙行され、義言は前日から京都に入り当日の儀式に参列したが、すでに堂上方において国学者としての高い知名度を得ていた彼は、随分好遇されたようであり、十一月一日付で堀内広城に送った書状には、次のように記されている。(中略) 知己の計らいで紫宸殿における儀式を間近で見ることができたうえに、その後関白鷹司政通や諸大夫衆とも親しくなり、義言が関白の求めにより和歌を献上することになったことに加え、種田兵部少輔や鈴木左衛門大尉らの案内により紫宸殿・内侍所・清涼殿の内部を具に見学できたことも伝えている。

- (17) 『歌の大意』とは、義言の歌論書。弘化二年成立。私家版として刊行されている。

- (18) 進藤千尋(為周。生年未詳)明治十一年(一八七八)青蓮院官坊官。国学に通じていた。

鷹司政通(寛政元年(一七八九)〜明治元年(一八六八)公家。文政六年(一八二三)関白、弘化三年に孝明天皇の摂政となる。

- (19) 千種有功(寛政九年(一七九七)〜嘉永七年(一八五四)公卿・歌人。号は千々廻舎。飛鳥井家に学び香川景樹らと交友があった。

- (20) 倉谷友子とは、藤原友子のことか。『平安人物志』文政十三年版によると、藤原友子は室町丸太町南、倉谷主水とある。

長沢伴雄(文化五年(一八〇八)〜安政六年(一八五九)和歌山藩士、歌人。

小泉保敬(〜嘉永五年(一八五二)京都の国学者。

三浦尚之(享和三年(一八〇三)〜明治七年(一八七四)医師・彦根藩士。号喜多廻舎。義言の古参門人である。前掲注5「堀

長野義言が見た即位礼―義言『長月日並乃記』からみる即位礼拝観と文化人との交流について―(浦野)

長野義言が見た即位礼―義言『長月日並乃記』からみる即位礼拝観と文化人との交流について―（浦野）

内家蔵「長野義言尺牘」一」注記に詳しい。

木村寛（明治十三年（一八八〇）医学、儒学を学び、義言に入門。号藤廼舎。彦根藩校弘道館教授を務めている。前掲注5
「堀内家蔵「長野義言尺牘」一」注記に詳しい。

一井倭文子（天明五年（一七八五）嘉永四年（一八五二））歌人。賀茂季鷹門人。

Nagano Yoshitoki's View of Japan's Imperial Enthronement Ceremony:
His Observations of It and Interactions with Cultural Figures As
Described in *Nagatsuki Hinami no Ki*

URANO Ayako

Abstract

Nagano Yoshitoki was a scholar of national learning in the late Edo period (19th century) known for being a close aide to the chief minister, Ii Naosuke. He served in Hikone province and became deeply involved in politics under Naosuke, making him a feared figure. However, Yoshitoki did not pursue nativist studies for the sake of politics. As a scholar of national learning, he also interacted with cultural figures from various places through Japanese classical literature and poetry gatherings. On September 23, 1874, when the enthronement ceremony of Emperor Kōmei was held, Yoshitoki had an opportunity to witness it. In his travelogue *Nagatsuki Hinami no Ki*, which depicts the situation at that time, he describes the rituals and the furnishings, as well as how he interacted with various intellectuals in Kyoto. This paper clarifies how *Nagatsuki Hinami no Ki* was created, its significance, and the interactions Yoshitoki had.

keywords : Nagano Yoshitoki, enthronement ceremony, *Nagatsuki Hinami no Ki*, cultural figures, interactions